

トン、トン、トン、トン

宮本 俊太朗

トン、トン、トン。

足音がした。家のなかは僕だけなのに。

母さんはアメリカに出張していて、あと八日間は帰ってこない。父さんが仕事から帰ってくるまで、あとたっぷり五時間はある。

足音はだんだん近づいている。音のするほうを見ると、だれもない。

トン、トン、トン。

どんどん近づいてくる。

僕は逃げた。できるだけ速く走った。

二階の、僕の部屋に閉じこもり、カギをかけた。でも…トン、トン、トン。

姿の见えない足音もどんどん追いかけてくる。

僕の部屋の前で止まった。

「ここをあけて」

と言われた。

思ったよりもずっと優しい声だった。

「あけて」

今度はさつきよりも少し怖い声で言われた。

ゾクッと寒気が走った。でも、あけないでがんばる。

「ここをあける、ここをあける」

と、ドアをがちゃがちゃ揺すられた。冷や汗が全身

から噴き出したが、あけなかった。

しばらくして、しーんと静まり返ったので、おそるおそるドアの外を見ると…誰もいなかった。

時計を見ると、十六時半だった。

次の日、僕は勇気を出して父さんに話してみた。父さんは

「気のせいだよ」

と笑って、仕事にいつてしまった。だが、その日も、その次の日も、そのまた次の日も、謎の音は続いた。

母さんに会いたい、母さんなら、僕の話をお笑わずに聞いてくれて、僕の気持ちを受け止めてくれるはずなのに。

トン、トン、トン。

今日も足音がした。怖い、助けて、母さん。

いつも通り、二階へ逃げようとしたが、今日はどうしたはずみか、間違えて、玄関のドアをあけてしまった。

すると、そこには、アメリカにいるはずの母さんが立っていた。僕を見てにっこり微笑むと、母さんは消えた。

そのとき、家の電話がなった。出ると、父さんからだった。

「母さんが事故で死んだ」

十六時半だった。